

テーマ「暴力とはなんだろうか？」

進行役：佐藤啓介

題材：雁屋哲原作・由起賢二作画『野望の王国』（日本文芸社、1977-1982）

マンガの概略：野望に燃えた男たちが、日本の覇権をめぐって、倫理や道徳を度外視して暴力を繰り広げる。暴力団、警察官、右翼団体、自衛官、政治家、宗教家…。自らの野望の王国を実現するのは誰だ？（登場人物、人間関係その他は次ページ以降参照）

取り組んでみたい問い：

- ◎「暴力」とそうでない力はどう区別されるのか？（そもそも区別できないのか？）
- ◎「暴力」が必要な場合・許される場合とはどんな場合か？（そもそもそんな場合は存在しないのか？）
- ◎社会や人間関係には暴力が必要なのか？
- ◎人はなぜ「暴力」に魅せられるのか？「暴力」の魅力とは？

「『野望の王国』の主題は「暴力」である。……なぜ、私がそこまで暴力を徹底的に描こうとしたか、それは、普通に生きている人たちに自分たちの住んでいる社会の本質を理解してもらいたいと思ったからである。」（『完全版』2巻、2002年、あとがきより）

「フランスの思想家、モーリス・メルロ＝ポンティはその著書『ヒューマニズムとテロル』の中で、「我々は無垢と暴力の間で選択しなければならないのではなくて、異なった種類の暴力の間で選択しなければならないのだ。暴力は我々が肉体を持った存在である限り、我々の宿命なのだ」と言っている。震え上がるような恐ろしい言葉だが、人間という存在の真実を冷徹に示している。」（『完全版』3巻、2002年、あとがきより）